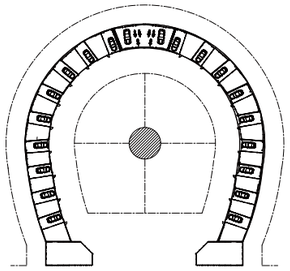
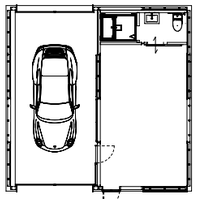
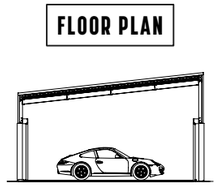
世界文化遺産にも登録された『ブリッツの馬蹄形住宅』。元々あった池を囲むように住居を建築したランドスケープ建築。いまだに居住者が生き生き過ごす現役のジードルンク（集落という意味）。

Text/Atsushi TAMADA







FLOOR PLAN

アクティブ老人用『馬蹄形クルマ共生住宅』のプラン。各戸はすべて同一形状で同じ条件で中庭に面する。豊かなガレージと水まわりのシンプルなつくり。食事は食堂やアウトドアキッチンで楽しくいただく設定です。天井が高いガレージと居室が持ち味。

デイトナが提案する
新しい建築のカタチ

DH×L
DAYTONA HOUSE×LDK

老後が楽しみだ！“馬蹄形住居”をモチーフにした!!

モーターライフ共生型高齢者住宅

あの「桂離宮」の美の発見など日本人になじみの深い戦前のドイツ人建築家ブルーノタウトの代表作『馬蹄形集合住宅』をモチーフにして、楽しいモーターライフ共生型高齢者住宅を考えてみました。

第二次大戦前に活躍したドイツ人建築家ブルーノ・タウトは、日本の建築文化に対する最大の理解者の一人でした。彼は第一次大戦の敗戦で疲弊したドイツで困窮にあえぐ労働者階級のための秀逸な集合住宅を、住宅局の役人として考案したことで有名です。時はおりしもナチスドイツが政権を奪取した時代。ドイツ国内の思想統制が強まる中、彼は社会主義的であるという嫌疑で危険視され、窮地に陥りました。

1933年3月悪名高い『全権委任法』成立の直前に、ナチスから逃れるために日本に旅立ちました。日本の『インターナショナル建築会』の招きに応じての来日という建前です。そしてその後、トルコに渡るまでの３年間、日本に滞在したのでした。“逃亡者”としての彼の目に映った日本建築。そして日本人の気質について書いた評論集『ニッポン』をはじめとする多くの著作は、非常にユニークで、中でも来日の翌日案内された『桂離宮』を激賞した文章は、盲目的な“西洋化”にシフトしていく日本人への警句として貴重な示唆に富むものです。

今回はそのブルーノタウトに敬意を表し、彼の代表作にして、後年世界文化遺産にも登録された『ブリッツ大規模住宅団地』をモチーフに、モーター＆アウトドアライフを内包した高齢者住宅を考えてみました。

航空写真で見るとよくわかるように、彼の集合住宅（ジードルンク）の特長は、馬の蹄鉄の形状をしています。建物を大きくカーブさせることによって、内側に囲い込まれた住民共有の“内部”ができます。この内部は“自然発生的”なので、建築家のエゴが混ざった不必要な“意図”を感じない、言わば“在りのまま”を過ごせる場所です。そして更に重要なことは、このプランが高齢者住宅とは言っても、いわゆる“老人ホーム”ではなく、歳をとっても生き生きと過ごせる住居を意図しているとです。住民は皆クルマ好き、バイク好き、畑好き、アウトドア好きと設定。なので、個室はもちろんすべてガレージ付きです。愛車を駆って外部に飛び出していくことも自由なのです。

一方自然発生的な“内部”の空間では、他の居住者と共有の“土に親しむ生活”が豊かで楽しい。畑で作物を育てたり庭を手入れしたりできます。独特の“動と静”のバランス。何かに急き立てられて“動かざるを得ない”若いころの生活と違って、純粋の“能動的意思”が年を取って初めて意識されるのです。“動くアクティブ老人”の住居。それでいて、土地に親しみ、人間の本源を見直すような“静”の生活。時間の流れが実感でき、日々充実した時間を味わうような老後が過ごせる住処なのです。

馬蹄の両端で、中庭の門に該当する場所に位置する部分は、共有の生活機能が入る設定。事務所機能以外に居住者の食堂、談話室、トレーニングルーム、コインランドリーなどが収まる趣向となっています。

また、建物内には居住者共有の食堂やコミュニティスペースも併設。ごく自然に適度な距離感での人間関係が形成されることでしょう。このような馬蹄形高齢者住宅のことをイメージすると、老後のことなのに、むしろ若いころよりも豊かでわくわくする生活のような気がしてきます。若い時には時間は勝手にどんどん過ぎていきますが、年老いて、“時間の手触り”を実感しながら生きる充実感が“元気な老後”を形成してくれることでしょう。こんな老人ホームがあったら、積極的に入りたいと思いませんか？

What's DAYTONA HOUSE ?

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのが軽量鉄骨のLGSパネル。厚さ3㎜～4㎜、幅12.5㎝、厚み5㎝の『Cチャンネル』と呼ばれる部材を、横幅182㎝、縦270㎝の長方形に溶接して製作。デイトナハウスは、この基本の形を連結することで、住宅やガレージのみならず、別荘、店舗、賃貸住宅などの様々な建築を作っていく、全く新しい建築のカタチとなっています。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感と、力の伝達を受け持つ『ブレース』が織りなす、インダストリアルで飽きの来ない空間のテイストも持ち味となっています。

LDK inc. 代表　玉田敦士

デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc.。建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。

www.daytona-house.com

1 ビオトープに面した畑や庭や車の乗り入れもよくわかる『21世紀型高齢者用馬蹄形住宅』の俯瞰図。瑞々しい朝、池のほとりに佇んで同好の友人と話すイメージだけでもワクワクする老後の生活イメージです。
2 レンガ敷きの中庭に面する部分にガレージから少しクルマを乗り入れているだけで、ごく自然に他の居住者との会話が生まれる究極のコミュニティー建築。その資質を表現したイメージカット。 3 各戸に備わるガレージは、完全開放が可能。クルマ１台とバイク２台が悠々収まるスペース。それだけではなく、趣味のギア類や農機具なども格納可能。ガレージから見た畑や庭は、アクティブ老人の老後にピッタリな瑞々しさです。CGの真ん中に見える空間は、リフトを備えた共同のガレージピット。自分達のクルマを直したり、近隣の若者のバイクを直したりと、モーターライフを通じて高齢者と若者が交流を図るための空間なのです。

全国に続々登場中！地方を再活性化する リゾート型GLBの可能性

賃貸ガレージハウス『GLB』が進化中。都市部や郊外だけではなく、地方の風光明媚な場所にも続々誕生してきました。今回は、新しいライフスタイルツールとしてのリゾート型GLBの可能性を考えてみます。

テレワークがもたらした21世紀の実感と、その戸惑い

21世紀の始まりの20年間。私たちは、さほど社会の変化を実感できずに過ごしていました。確かにインターネットが日常化したり、スマートフォンが必需品になったりしたことは、その後の社会の変化に多大な影響を及ぼしましたが、生活の実感としては、家電製品の性能がどんどん良くなることの延長のような感覚でした。〝便利〟が進展し、〝時間が節約できる〟という感覚の延長線上。これは、20世紀少年でも子供のころから慣れ親しんでいた印象です。

しかし2020年代に入って、コロナパンデミックが全世界を席巻。その結果としてテレワークが日常的に普及したことは、「生活そのものが変化した！」という意味で強烈に〝時代の変化〟を感じる出来事でありました。実際にリモートで仕事が成立するという現実を身体感覚で実感して以降、21世紀の実像を思い知らされた……そんな印象の方も多いことでしょう。

従来は、身体を〝仕事の場〟に移動させること自体が〝仕事〟の一部でした。しかし身体を移動させること自体が、何かを生産しているわけではありません。考えてみれば、これは当たり前のことですが、テレワークが一般化する中で、改めて〝仕事の本質〟が浮き彫りになってきたと言えるかもしれません。

環境の良いリゾート地でも仕事が成立する驚きと喜び

テレワークの一般化によって、〝仕事の場〟に身体を移動させることの意味が薄れ、仕事の本質が浮き彫りになりました。大雑把に言えばそれは〝新たな価値を生産する〟ことです。テレワークが可能になったことで家から出る必要がなくなり、半ば引き籠り状態になった人も多いと言います。しかし、一部の人は、むしろ環境の良い場所や美しい景色の場所に身体を移動させても〝仕事〟が成立することがテレワークの利点であることに気が付き始めました。〝新しい価値〟を生産することが仕事であるならば、むしろ環境の良い場所に能動的に移動して、精神と脳味噌をリフレッシュしたほうが、むしろ良い仕事ができる。そう気づき始めたのです。最初はコロナパニックという不幸から始まったテレワークですが、その状況を逆利用できる人にとってテレワークはプラスイメージで解釈され始めたのです。

〝移動手段〟を内包するGLBをリゾート地にもっていくその意味

一部の積極的な人たちによるテレワークの〝拡大解釈〟によって、〝移動〟の意味もそれに伴って豊かになったと言えるかもしれません。仕方なく身体を仕事の場に移動させる〝消極的移動〟ではなく、環境の良い場所に動き、仕事も遊びも同時に成立させる〝積極的移動〟生活。コロナとテレワークの普及が呼び覚ましたのは、この〝積極的移動〟なのです。一方で、愛着のあるクルマやバイクなどの移動手段を内包する賃貸住居形式であるGLBのユーザーは、もともと〝積極的移動〟をライフスタイルに取り込んでいる人たちです。その潜在的なニーズの中から、自然発生的に地方やリゾート地など環境の良い場所にGLBを建築するニーズが立ち現れてきたのです。それがこれからご説明する『リゾート型GLB』なのです。

従来の〝別荘〟というステイタスの象徴物とは明らかに動機が違う全く新しい建築です。更に、リゾート地への移動そのものを〝脳内にインプット〟できる人たちをモーターフリークというのですから、①移動の愉しみ、②素晴らしい環境での脳内リフレッシュ、③新しい価値創造としての〝仕事〟という三つの要素が成立する、まさに一石三鳥のライフスタイルが誕生したのだと解釈しています。

今後のリゾート型GLBの発展可能性

従来型の賃貸形式＝アパートでもなく、ステイタスを振りかざすための〝別荘〟でもない新しいライフスタイルツールとしてこの『リゾート型GLB』は、一部の積極的に時代を生きる人々にとっては、非常にニーズの高いものです。そのため全国に増殖を始めましたが、まだまだこのムーブメントは始まったばかり。今後ますます先述の〝一石三鳥〟をより効果的に、理に適ったカタチで満たすリゾート型GLBが生まれてくることでしょう。

例えばリゾート型GLBをシェアできる新しいカタチや、リゾート型GLB内の利用者のコミュニティ形成、あるいは、環境の良い場所でのクルマ好き高齢者専用GLBなど、最初は個人的な発想や生活上の工夫であったガレージ賃貸のリゾートでの利用が、同時に多くの人や地方都市の〝元気〟を創造していることが次第に明らかになれば、おのずと〝次世代型のリゾート型GLB〟が発想されていくものと思われます。そう考えると、21世紀型社会は、案外楽しい社会になるかもしれません。〝賃貸〟で自由／フリーダムを実感する。美しい日本の風景とともに、ガレージ賃貸住居GLBはますます私たちを元気にしてくれそうです。

ニッポンの代表的な景観
富士裾野の美しさを実感できるGLB

富士須走BASE I

御殿場インターから樹海を縫って山中湖道路をさらに回り込む自然環境豊かな場所に須走GLBはあります。クルマ好きには富士スピードウェイから至近距離と言ったほうがわかりやすいかもしれません。広大な敷地に続編の計画もありますが、今回はその第一期のリリースです。四季折々、脳細胞が洗われるような、素晴らしい空気感の場所なのです。

都内から40分！
房総リゾートへの中間基地をゲットせよ!!

GLB AQUA-KISARAZU

都内からアクアラインで海を渡り、上陸直後の金田西出口から10分の好立地。2×4スパン吹き抜け付きのA棟と、3×4スパンのゆったりタイプのB棟。2棟が向かい合ってクルマ・アウトドア好きご用達の別世界を実現しています。新タイプのB棟はファミリーの居住はもちろん、効率的なショールーム兼の事務所としても最適です。

モーターライフと温泉地の融合
箱根ファンに捧げるGLB

HAKONE YUMOTO BASE

古くからの温泉地で文化的集積も豊富な箱根の中心地＝箱根湯本。清冽なる早川を渡った対岸にあるGLB。ここでだったら、いろんな遊びが考えられる場所なのです。

八ヶ岳を一望する茅野市のGLB
縄文ファンにもたまらない好立地

ARTS 蓼科

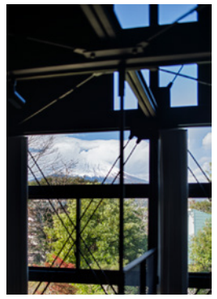
ロードでもオフロードでも自転車フリークには垂涎の場所である長野県茅野・諏訪エリア。そこに建つ3世帯のGLBです。雄大な八ヶ岳の全貌を実感できる山岳GLBなのです。

淡路島洲本の海を目前に見る
リゾート系GLB関西代表

WELL GARAGE

大阪湾に面した淡路島巣本の海岸沿いに建つ好立地のGLB。明石海峡大橋を渡れば大阪から1時間のオーシャンビューを独り占めできるのです。特に朝日が美しいオーシャン隣接GLBです。

雄大な富士山に正対して
新しいリゾートライフを
体現するGLB

GOTENBA BASE

ガレージシャッターと2Fのリビングのガラスファサードを富士山に正対する側に向けた変則的なプランを特長とする5世帯のGLB。御殿場インターからも近く、都内に住む人にとっても程よい中間距離がうれしいのです。日本を代表する大パノラマの四季の変化が脳内をその都度リフレッシュしてくれるのです。